

## クリスチャン・ヘラルド紙の東北大飢饉支援のための寄附金集め —米国民のアジアへの関心の高まり—

○ 熊本学園大学 氏名 西崎 緑 (会員番号 000410)

キーワード3つ: 東北大飢饉、キリスト教、クリスチャン・ヘラルド紙

### 1. 研究目的

本研究は、米国キリスト教の新聞クリスチャン・ヘラルド紙が東北大飢饉（1905～6年）被災者に対する支援として行った寄附金集めの実態と、その背後にある当時のアメリカのアジアへの関心と中産階級の市民的連帯意識を明らかにすることを目的とする。

クリスチャン・ヘラルド紙は、Joseph Spurgeon によって 1878 年にニューヨークで創刊された福音派のキリスト教新聞である。当初から貧困者へのキリスト教伝道と慈善活動に取り組んでいたが、特に 1898 年に同紙を買い取った Louis Klopsch の時代になると、慈善事業をさらに拡大し、国外の被災者への支援にも乗り出す。東北大飢饉の際にも数か月にわたる紙上キャンペーンを展開し、多額の寄附金を日本赤十字社宛てに送っている。

そこで、本報告では、当時のクリスチャン・ヘラルド紙の記事に見られる寄附集めの紙上キャンペーンの論調と寄附者リストを分析し、その結果から見えてくる当時のアメリカの政治的関心と中産階級の人々の意識を明らかにする。

### 2. 研究の視点および方法

まず一次資料として、クリスチャン・ヘラルド紙（ペンシルヴァニア大学 online archive 所蔵・公開中）vol. 29(1906)を素材に、日本の東北大飢饉の状況描写、紙上キャンペーンとその論調、毎号掲載された寄附者リストを分析する。

また先行研究に、在日宣教師の被災者救助活動とニューヨーク・タイムズやクリスチャン・ヘラルド紙との関係を描いた M. William Steele(2013)「The Great Northern Famine of 1905-1906: Two Sides of International Aid」国際基督教大学学芸 3-A アジア文化研究 39, 1-15 や、岡山孤児院への外国からの寄附金について触れた菊池義昭(2021)「1899年8月からの岡山孤児院の海外幻燈遊説隊の巡回運動とその周辺」石井十次資料館研究紀要 22, 51-125 があるため、それらとの照合も行うこととする。

### 3. 倫理的配慮

本報告は、公開史料を研究対象にしており、人を対象とする研究ではないが「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」（2018年5月27日施行）ならびに「日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守する。また研究目的を外れて社会

的に不適切と考えられる用語や差別的表現とされる用語を使用せず、捏造や剽窃、改竄をおこなっていないことを表明する。本発表に関連して、開示すべき COI はない。

#### 4. 研究結果

東北大飢饉の記事が最初に見られるのは、Vol.29 No.5 (1906年1月31日号)であり、日本救援基金の設立が述べられていた。続いて Vol.29 No.7 (2月14日号)には、さらなる救援への呼びかけと、それまでの寄附者の名前と金額が掲載されていた。Vol.29 No.8 (2月21日号)には、日本の農民の苦境の記事と追加寄附者の名前と金額が掲載されていた。

Vol.29 No.9 2月28日号には、最初の10,000ドルが2月14日に日本赤十字社総裁松方卿あてに送金したことが記載されていた。ただし、予想よりも飢饉がひどいため、さらなる寄附金が必要だと訴えていた。仙台のドイツ改革派教会牧師 W. E. Lampe を中心に日本人青年も加えて救援委員会が設立されていることも書かれていた。

Vol.29 No.10 (3月7日号)の表紙は、おそらく日本への救援の関心を集めるためと思われるが、日本の皇后の写真となっていた。p.202にはさらに飢饉の情報と寄附者名、金額、p.203には日本赤十字社のこと、その理事たちのことが写真入りで紹介されていた。Vol.29 No.11 (3月14日号)では、飢饉の被害者の農民の写真が掲載され、さらに20,000ドルを日本赤十字社に送ったことが書かれていた。Vol.29 No.12 (3月21日号)では、追加で15,500ドルを送ったこと。寒さの中で飢えに苦しむ人、自殺者も出ていることも記載された。1906年の寄附者リストが p.251 全面に見られたので、多数の寄附者があったことがわかる

Vol.29 No.13 (3月28日号)では、追加で50,000ドルが送られ、東京から感謝されたこと、3月9日までの寄附者名簿が p.280 に掲載された。Vol.29 No.14 (4月4日号)表紙は、イラストで日本の農村の母子が描かれていた。3月16日までの寄附者名簿のほか、セオドール・ルーズベルト大統領からクリスチャン・ヘラルドとその読者に日本に救援金を送ってくれたことに感謝するというメッセージが掲載されていた。

Vol.29 No.15 (4月11日号)の社説は、日本の飢饉での死亡者数が増加していることに触れ、日本の画家が描いた飢饉のイラストが掲載されていた。3月23日までの寄附者名簿も掲載されていた。Vol.29 No.16 (4月18日号)では、3月30日までの寄附者名簿が掲載され、飢饉が少しずつ収まってきたこと、しかしながら緊急的な救済はまだ必要であることが書かれていた。

#### 5. 考察

クリスチャン・ヘラルド紙は、日本の飢饉の情報を報道し、積極的な支援を展開した。それを通じて、海外宣教への読者の関心を喚起しただけではなく、大統領のメッセージを加えるなど、アメリカ合衆国のアジア進出を市民に意識づける役割を果たしたといえる。